

歴史的建造物の保存・再現・表現に関する研究  
—中国山東省青島市の事例とワープステーション江戸の事例を通して—

A Study on Reproduction and Expression  
in the Preservation of Historical buildings

内藤 旭恵  
Akie NAITO

(令和元年9月30日受理)

世の中は、歴史的建造物の保存において、「再現」と「表現」に関する議論に移行しつつある。そこで本研究では、「中国山東省青島市の事例」と「ワープステーション江戸の事例」を通して、歴史的建造物の保存における「再現」と「表現」について明らかにしたいと考えている。

**キーワード**：歴史的建造物、デジタルアーカイブ、再現、表現

**Keyword**：Historical buildings, Digital Archive, Reproduction, Expression

## 1. はじめに

近代日本は、明治元年から始まり、大正、昭和、平成、令和と5つ目の元号の時代に入った。2018年(平成30年)には、1868年(明治元年)から数えて150年を迎え、各地で様々な明治150年記念行事が催された。こうした状況の中で、歴史的建造物の保存にも注目が集まり、過去の風景を懐かしむ「懐古主義」、過去に戻りたいと考える「回帰主義」、過去に戻ったと錯覚をする「プルースト現象」といった言葉とともに、過去の都市に行ってみたいという感情を持った人々が増えており、これらの社会現象も注目すべき点である。

近年、戦前・戦中・戦後を取り上げたNHKスペシャルでは、1920年代や1930年代の内地や外地の街並みが映し出されることがあることや、NHK大河ドラマ「いだてん」やNHKの朝ドラ「なつぞら」の中では、近現代の日本の街並みがしばしば取り上げられることがあり、歴史的建造物は一般の人々の目にも多く触れるようになってきた。

そこで議論が活発になったのが、歴史的建造物を「見える化」することは「再現」であるか「表現」であるかという定義である。二つの言葉は、大辞泉[1]によると次の通りである。

「再現」とは、『物事が再び現れること、また、再び表すことである』とされている。

「表現」とは、『心理的、感情的、精神的などの内面的なものを、外面的、感性的形象として客観化すること。また、その客観的形象としての、表情・身振り・言語・記号・造形物など』とされている。さらに、情報学的観点や建築学的観点においても、議論は大きく分かれており、明確な定義は成されていない。

これらの議論に対して、実際に街中に現存する歴史的建造物と映像セットを比較することで検討したいと考えている。本研究においては、類似設計や創造設計、想像設計を含むが、当初の状態に近付けようとしたものを再現とし、類似設計や創造設計、想像設計によって新しいものを作り出している場合には表現とすることとした。特に、中国大陸の中でも、ドイツ（德国）が統治し、その後、日本が統治した青島市は、観光誘客にも当時の歴史的建造物を利活用しており、近代建築がより多く現存する地域でもある。また、映像セットは、近年、近現代エリアを建設したことで有名になったNHKエンタープライズ所有のワープステーション江戸を事例として取り上げる。

## 2. 先行研究のレビュー

これまで、歴史的建造物の現物保存に関しては、内藤[2]や内藤[3]、内藤[4]、内藤[5]、内藤[6]、内藤[7]、内藤[8]、内藤[9]の中で議論してきた。具体的には、歴史的建造物の保存の意義や、保存の分類、保存方法、保存と復元・復原、再現に関して触れてきた。また、歴史的建造物を保存し観光誘客に利活用するといった面からも山口[10]が研究を進めてきた。一方、映像セットに関しては、阿部[11]や高瀬[12]、李木[13]、吉田[14]が存在するが、表現手法や空間表現に関する研究がその大半を占めており、歴史的建造物をどう残し、どう再現または表現するかといった議論は活発には行われていない。また、映像セットを作り上げる人々にとって、いかに映像映えするのかといった視点で制作を行っているため、忠実な再現や表現という視点には立っていないことが関係者へのヒアリングの結果明らかになった。さらに、再現か表現かの判定は、図1に示した当時の絵葉書と現物の比較によって判定する手法を採用した。



図1. 調査方法

### 3. 青島市における歴史的建造物

#### 3. 1 失われた歴史的建造物

##### ①所澤町（堂邑路）

所澤町は、旧日本人街の一つである。最も栄えた繁華街であり、金融街やオフィス街と呼ばれていた。街道筋には、外地では欠かすことのできない郵便局や横浜正金銀行などの金融機関、そして、三井物産（三井洋行）などが軒を連ねていた。現在は、旧市街と呼ばれており、大規模な歴史的建造物が林立している地域でもある。その代表的な建造物は、三井物産や横浜正金銀行、証券取引所などが残されている。図1、図2、図3は、昭和初期の所澤町の写真である。一方、図4は現在の堂邑路である。同一地点から撮影しているが当時の面影はなく一変しているが、写真右側の郵便局であった場所には、現在も郵便局のビルとなっており、都市の記憶は継承されていた。しかしながら、当時の建造物は、完全に消失しており、ファサードの再現も表現もなされていない。堂邑路を右に折れると、市場町一丁目（市場一路）、市場町二丁目（市場二路）、市場町三丁目（市場三路）が広がっている。



図2. 所澤町（堂邑路付近）（絵葉書）



図3. 所澤町（堂邑路付近）（絵葉書）



図 4. 堂邑路交差点

②市場町二丁目（市場二路）

市場町二丁目は、当時、特徴的な近代建築が林立していた地域である。図 5、図 6、図 7 は、いずれも昭和初期の市場町二丁目を撮影したものであるが、煉瓦建築や塔屋がある建築、看板建築など様々な建造物が入り混じっていたことがわかる。一方、図 8 は現在の同地から撮影したものであるが、建造物は一掃されていることがわかる。このように、現在の繁華街や人口密集地域では保存すらされておらず、現代的な鉄筋コンクリート造建築に置き換えられてしまっていた。



図 5. 市場町二丁目（絵葉書）



図 6. 市場町二丁目（絵葉書）



図 7. 市場町二丁目（絵葉書）



図 8. 市場二路

図 9 は、堂邑路と市場二路の交差点である。当時は、堂邑路側に直進すると金融街やオフィス街が存在し、市場二路側に右折すると個人商店が立ち並んでいたのである。現在、目印となるものは、図 10 の旧三井物産跡である。当該建造物は、当時の詳細な写真が残されていないが、3 階部分が増築されている状態である。



図 9. 堂邑路市場二路交差点



図 10. 旧三井物産跡

図 11 と図 12 は、旧三井物産跡のファサードおよびディテールの状態を撮影したものである。他の建造物はバリアフリー化などが施されていたが、当該建造物は、手を加えられていない状況である。老朽化は著しいが、ファサード部分は当時の雰囲気や様子を留めているといえる。一方で、図 11 では、地階採光窓が温存されているのに対して、図 12 では、埋められており、花壇のようなものが後から追加されている状況であった。

中国大陸に残された歴史的建造物は、(1) 中国政府や市政府などが史跡として積極的に保存を試みているケースと、(2) 銘版の掲出のみに留め積極的に取り組まれていないものと、(3) 全く歴史的建造物とは知らず、好き勝手に改修されて一般市民が使用しているという 3 パターンに分けることができる。当該建造物は (2) に該当する。従って、三井関係のオフィスであったことを示す銘版は掲出されているが、積極的な補修が行われておらず、朽ち果てている状況であった。その反面、窓や窓枠などが取り替えられていないため、当時の窓の開閉方法やガラスの様子なども確認することができる。つまり、当時の雰囲気や様子を感じ取ることができるとともに、技術や工法、施工方法などの情報も外観を確認することで判断できる。



図 11. 採光窓の状態



図 12. 採光窓の状態

### ③青島神社

青島神社は、1918年に着工し1919年10月に竣工した中国大陸に存在した神社である。敷地は靖国神社の約2倍あり、ご祭神は天照大神と明治天皇であったとされている。祀られていた鏡は、戦後明治神宮に返還されたとのことである。

図13と図14は、昭和初期の青島神社を撮影したものである。日本国内の神社と変わらない境内の造りとなっている。近隣には、旧日本人街があり、2階建ての住宅が立ち並んでいたという川崎町（益都路）があったほか、日本人街で暮らす邦人は、神社の前を通過して通学したり、通勤したりしていたという記録も残されている。



図13. 青島神社（絵葉書）



図14. 青島神社（絵葉書）

図13と図14と同一の場所から撮影したものが、図15、図16、図17、図18である。当時の遺構が残されている部分は、参道と階段である。参道に植えられた桜は針葉樹に植え替えられているが、階段に使用されていた石段は当時のものであった。



図15. 児童公園・貯水山公園（旧青島神社跡）



図16. 参道跡



図17. 参道跡



図18. 参道跡



図19. 参道跡

図 19 および図 20、図 21、図 22、図 23 は、当時境内のあった山頂部分である。拝殿・本殿の手前の部分までは遺構を確認することができる。鳥居の礎石やベンチなど当時使用されていた遺構が残されていたが、拝殿・本殿が存在した場所は、現在駐車場となっており、階段側から立ち入ることは不可能であった。百度地図によって確認をした結果、逆側の坂道を上り到達できるようになっていた。青島では、ドイツ（德国）が残していった大聖堂などは中国人にも信者が存在するので保存・維持されていたが、神道は日本固有の文化であり、中国人には無関係であったため、やむを得ず撤去したとのことである。



図 20. 拝殿・本殿跡



図 21. 左側鳥居礎石

図 22. 右側鳥居礎石

図 23. 境内跡ベンチ

### 3. 2 現存する歴史的建造物

#### ①旧司令官邸（青島迎賓館）

旧司令官邸は、中国政府が観光資源として積極的に保存および活用している歴史的建造物である。ドイツ（德国）が建設した歴史的建造物の一つである。旧司令官邸は、旧青島守備軍司令部から徒歩圏内に存在し、日中総督府で勤務し、旧司令官邸に帰宅するという生活スタイルだったとのことである。当該建造物は、第一次世界大戦から第二次世界大戦期にかけての建造物であるため、青島の湾口を一望できる場所に建設されている。万が一敵軍が侵攻してきた場合でも、瞬時に視認できる位置に存在し、さらに、司令官の書斎は、海側に面した場所に存在した。常にデスクから視線を上げると、青島の湾口が一望でき、常に監視できるという部分が当該建造物の大きなポイントである。一方で、ドイツ時代の歴史的建造物であるため、間取りや装飾品、ディテールなどもドイツ式のユーゲントシュティルを中心とし、中世ヨーロッパ調と中華調を混合した建築様式となっており、非常に珍しい建造物である。一見すると、日本の赤坂に残る李王朝邸などにも似ている部分が多く存在する。

図 24 は、昭和初期の司令官邸を撮影したもので、図 25 は、現在の青島迎賓館を写したものである。外壁の色は変わっているものの、装飾品などはさほど手を加えられていない。



図 24. 青島司令官邸（絵葉書）



図 25. 青島迎賓館（旧青島司令官邸跡）

図 26 は、ドーマー窓である。ローテンブルクなどに残る歴史的建造物にも見られるドイツ様式が採用されている。



図 26. ドーマー窓

図 27 と図 28 は、日本統治時代の遺構であり、ドイツ（德国）統治時代よりも侵攻される可能性が高い国際情勢であったことを理解することができる。旧司令官邸の海側の中庭に作られたものであり、ディテール情報を細かく確認すると、鉄筋コンクリート造建築であることもわかった。



図 27. 旧日本軍要塞



図 28. 旧日本軍要塞

## ②青島守備軍司令部（青島市委員会）

青島守備軍司令部は、ドイツ（德国）時代に建設された歴史的建造物である。現在は、青島市委員会の施設として使用されている。図 29 は、昭和初期の青島守備軍司令部の写真である。ドイツ（德国）時代からさほど改修されていないように見受けられるが、ディテール情報に着目すると、メインエントランス上部のドーマー窓部分に時計が埋め込まれているのがわかる。様々な記述によると、青島守備軍司令部前の広場や傾斜地では軍事演習などが行われていた関係で、時刻を確認する必要があったなどの理由により、あとから敷設された可能性が高いようである。



図 29. 青島守備軍司令部（絵葉書）

図 30 と図 31 は、現在の青島市委員会庁舎を撮影したものである。ポストカードと比較しても、街灯や街路樹が一部変更されている程度であり、ディテール情報やファサードが大幅に変更されている様子はない。しかしながら、ポストカードの解像度はさほど良くないため、詳細までは判別することは不可能である。



図 30. 青島市政府



図 31. 青島市政府

図 32 は当時の青島守備軍司令部を撮影したものであり、図 33 は、図 32 と同一の場所から撮影した現在の写真である。図 32 の斜面に存在する柵の形状情報と本数から現在の場所を割り出し、確認した結果、図 33 に示した場所であることが判明した。現在は、傾斜地を埋め立てて、公園として整備されているが、当時は、斜面になっていた可能性が高い。図 33 を確認すると、柵を支える杭と杭の間が壁となっているが、配列と位置関係が同一であった。現在では、塀と街路樹によって青島守備軍司令部は確認できない状態であった。



図 32. 青島総督府（絵葉書）



図 33. 前庭の塀

### ③青島日本總領事館（集合住宅）

図 34 は、昭和初期の青島日本總領事館の写真である。海岸沿いに建っており、当時は、海側から入場できたが、現在では、陸側に回り込んだ場所からのみ入場可能となっていた。図 35 は、現在の建造物の写真である。若干の塗装の変化は存在するものの、大幅な変更は見受けられない。図 36 は、当時の正面玄関のレリーフを撮影したものであるが、装飾品の様子も当時の状態で保存されていることがわかる。図 37 は、メインエントランスの左右の大通りに面したファサードを撮影したものであるが、アーチ部や装飾品、レリーフなどのディテール情報は変更されていないものの、大幅に変更されている部分は、外側に配され

た回廊式のテラスが撤去され、アーチ部の境界部分まで部屋が増築されていることである。竣工当時は、優雅な政府建築であったため、無駄なスペースが多く、権威的で高級感を与えるようなファサードになっていたが、中国政府に返還された後は、少しでもスペースを増やそうと拡張しているのが特徴である。従って、当時のポストカードと現在の状況を現場で比較しながらディテール情報を確認するといった手法を用いることで、情報の過不足や再現された場所や表現されている箇所を判別することが可能であった。



図 34. 青島日本総領事館（絵葉書）



図 35. 集合住宅



図 36. レリーフ



図 37. ファサード

④青島軍政署（青島市庁舎）

図 38 は、昭和初期の軍政署の写真である。図 39 は、現在の青島市庁舎の写真である。いずれも同一の場所から撮影したものであるが、さほど改修が行われていないことが分かる。しかしながら、現場で注意深く確認すると、どの角度から撮影しても、屋根の高さが同一の高さになる場所が存在しなかったため、一部屋根が削り取られている可能性があるものと思われる。



図 38. 軍政署（絵葉書）



図 39. 青島市庁舎

⑤静岡町（中山路）

図 40 は、昭和初期の静岡町の写真である。図 41 は、現在の中山路の写真である。二枚の写真を比較すると、当時の建造物がそのまま同一街区に残されていることが分かる。しかしながら、注意深く確認すると、コーナーの屋根部分の装飾品が似ているが、一部変更されていることが分かる。概ね、同一の形状になっているため判別しにくいですが、図 40 では天窓が取り付けられているのに対して、図 41 は埋められていることが分かる。さらに、近

付いて確認すると、図 40 の一階部分中央入り口は階段があり玄関ホールになっているのに対して、図 41 では店舗入り口になっており、玄関ホールも店内に変更されている。さらに、外壁も図 40 は、一部石造になっているのに対して、図 41 では、全体的に表層に石が貼り付けられており、大幅な修正変更が加えられている。再現といった次元は越えており、新たなものを表現していると言える。



図 40. 静岡町（絵葉書）



図 41. 中山路

図 42 は青島大聖堂で、図 43 は青島大聖堂前広場を撮影したものである。図 40 に写り込んでいる煉瓦建築であるが、ドーム状の屋根が取り付けられているのに対して、図 42 の建造物は、ドーム部分が撤去されていることが分かる。さらに、煉瓦建築ではあったが、現在は、石造建築風に見えるように表面に石が貼り付けられており、これらも、再現ではなく表現となっている。一方で、図 43 の建造物は、図 40 でも確認できるように、形状情報や色情報が同一になっており、一部改修は行われているものの、当時の状態を十分に温存しつつ一部再現している状況である。



図 42. 青島大聖堂



図 43. 青島大聖堂前広場

図 44 は、昭和初期の静岡町（現中山路）の写真であり、図 45 は、現在の中山路（旧静岡町）の写真である。道路左側の建造物も当時のままの状態が残されていた。色は、ピンク色、黄色、緑色と三食になっているが、現在は、ピンク色一色に塗られていた。また、ファサードに関しては、当時のままの状態であったが、ドアや内観は、大幅に改装されており、現代の店舗となっていた。当時の静岡町は、日本人、中国人、ドイツ人が行き交う繁華街であったが、現在も変わらず、青島でも一位二位を争う繁華街となっていた。通常繁華街は、近代建築ではなく、現代建築に置き換えられることも多いが、地元住民や当時住んでいた日本人の話では、青島大聖堂もあり、観光地化しているため、景観保護の観点から保存された可能性が高いようである。しかしながら、日常生活を送っている住民も数多く住んでいることから、ドーム部などは撤去された可能性があるようだ。



図 44. 静岡町（絵葉書）



図 45. 中山路

⑥日本高等女学校（民家）

図 46 と図 47 は昭和初期の青島高等女学校の写真である。図 48 は、現在の当該建造物の写真である。中国政府に返還後は、青島医科大学の校舎として使用され、その後、ホテルに払い下げられたが、現在では、民家として使用されていた。また、校庭や他の校舎は、撤去され、マンションや黄台路として整備されていた。図 46 の右側に写っている建造物が現在残されている建造物である。

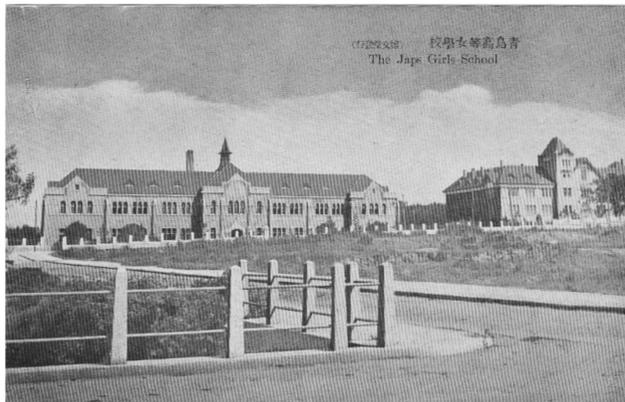


図 46. 青島高等女学校（絵葉書）

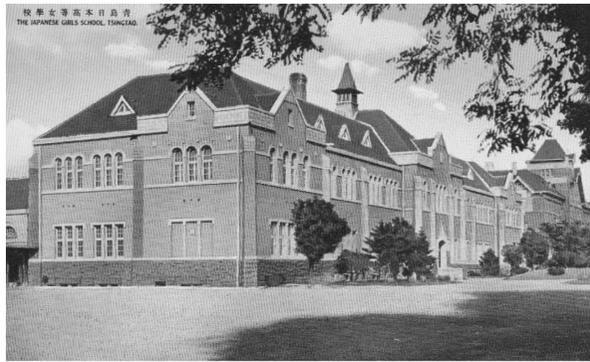


図 47. 青島高等女学校（絵葉書）



図 48. 民家

図 49 と図 50 は、いずれも当該建造物のファサードを撮影したものである。外壁の色や塔屋の状態も当時のまま保存されているようである。しかしながら、塔屋の屋根部分やドーマー窓上部の屋根瓦が剥がれ落ちている状況を見ると、あと数年で解体されるようなことも想像できる。



図 49. ファサード



図 50. 塔屋ファサード

⑦日本中学校（中国海洋大学）

図 51 は、昭和初期の青島中学校の写真である。当時の日本人は、男子が青島中学校に通学し、女子が青島高等女学校に通学するのが一般的であったとのことである。図 52 は、現在の中国海洋大学の写真である。中国政府に返還後、中国海洋大学の校舎として使用されている。門柱から校舎に至るまで当時のままの状態で保存されていることが確認できるが、図 51 には塔屋が存在するのに対して、図 52 では、登頂部分が撤去されていることが分かる。撤去理由は不明であるが、関係者によると、中国の国旗を掲揚するために撤去したのではないだろうかという説がある。または、メンテナンス上費用が掛かるといった理由を述べる者もいた。



図 51. 青島中学校（絵葉書）



図 52. 中国海洋大学

また、許可を得て、校舎に近付いて見ると、意外にも当時の状態から手を加えられていないことが明らかになった。図 53 のファサードや図 54 のインテリア、図 55 の廊下、図 56 のレリーフに至るまで当時の状態であった。特に、図 53 の外壁に埋め込まれた玉石は、当時のまま撤去されることなくはめられていた。さらに、図 56 のレリーフなども、塗装の上塗りによって、ディテール情報は、原形を留めていない部分もあるが、当時流行したデザインも現代に情報として継承できている。これらの情報は、ポストカードだけでは判断することができない貴重な情報であり、歴史的建造物の保存においては最も重要なことである。再現や表現ではなく、正確な保存ができているといえよう。



図 53. ファサード



図 54. インテリア



図 55. 廊下



図 56. レリーフ

⑧旧所澤町（堂邑路）

図 57 は、旧所澤町(堂邑路)に残る歴史的建造物群のファサードを撮影したものである。詳細を写した当時のポストカードが存在しないため、保存・再現・表現のレベルまでは判別できないが、概ねレリーフや装飾品、列柱まで当時の状態で残されているような印象を受ける。特に、図 58 のレリーフは、表現や創造設計・想像設計ではここまでディテール情報を建造物に違和感なく成形することは難しいと考えられる。



図 57. ファサード



図 58. レリーフ

図 59 は、銘版が掲出されており、当該建造物が歴史的建造物であることを正確に示している。また、図 60 の列柱や階段部の装飾品等も良好な状態で保存されていた。特に、エントランス部の街灯や照明は電気出力の関係上撤去されていることが多いが、当該建造物に限っては、完全保存されており、新たな発見であった。



図 59. 銘版



図 60. 列柱

図 61 は、昭和初期の大村町久留米町交差点の写真である。日本人高級官僚の邸宅が多く立ち並んでいた一帯である。図 62 は、館陶路呉淞路交差点の写真である。コーナー部分の屋根装飾は撤去されているが、その他の部分は、当時の状態で保存されていることがわかる。

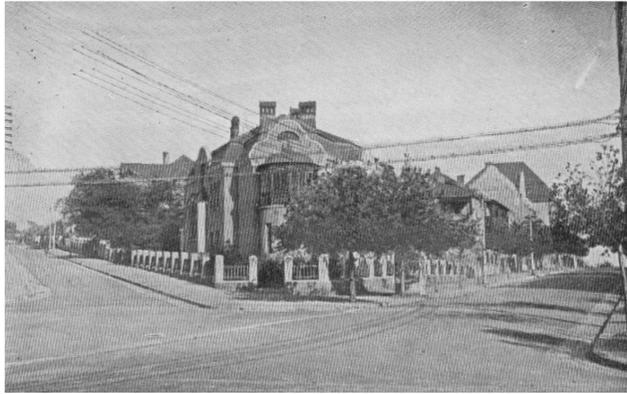


図 61. 大村町久留米町交差点（絵葉書）



図 62. 館陶路吳淞路交差点

図 63 は、現在の吳淞路ファサードの写真である。当時は、日本人高級官僚の邸宅が立ち並んでいた一帯であるが、現在は、商店街となっており、個人商店や 1960 年代から 1970 年代に建てられたと考えられる複合ビルに置き換わっていた。従って、当時の様子を把握するのは、当時から使われていたと考えられる塀くらいであった。一方で、図 64 に示した館陶路側のファサードは、当時の状態が色濃く残る状態であった。一部外壁が塗り替えられていることや、装飾品が撤去されているなどの改修は加えられていたが、概ね当時の状態に近い状態で保存されていた。



図 63. 吳淞路ファサード



図 64. 館陶路ファサード

このように、青島市街地を一周してみると、数多くの歴史的建造物が保存され、利活用されていることが明らかになった。ドイツ（德国）時代の歴史的建造物は、観光資源として大いに利活用されていたのに対して、日本統治時代の歴史的建造物は、そのほとんどが、個人宅や個人商店であったため、解体撤去されていた。また、当時青島で生活していた日本人にヒアリングした結果、ドイツ（德国）時代の建造物を日本が引き継いで使い、住生活環境は、日本式にする必要があったため、日本的な生活習慣を取り入れた建造物であったとのことである。その多くが、一階で個人商店を開き、二階で生活をするといったスタイルの建造物か、通りに面した二階建ての集合住宅であり、一階と二階を一つの家族で利用するといったスタイルの建造物が数多く建てられたとのことであった。しかしながら、その多くは、1960年代から1970年代の建て替えによって一帯開発され、道路や通りが消滅した場所も多く存在した。また、その後も残されていた建造物も2010年代から始まった現代的な高層ビル群への再開発によってその姿を消し、当時を偲ぶ景観は失われつつある。

歴史的建造物を保存し、再現または表現するという観点から青島の歴史的建造物を分析すると、商業施設や個人宅などは大幅に改修され、当時の状態や様子を継承することなく、新たなファサードによる新規設計が行われており、表現しているといった様相を呈していたが、公共施設やオフィスなどで利活用されている歴史的建造物は、正確な保存または一部再現されているといったケースが多かった。こうした状況が明らかになったのも、当時のポストカードが存在したことで、写真と現物を比較しながら現地調査できたことによる効果大きい。

#### 4. ワープステーション江戸における歴史的建造物

次に、歴史的建造物を保存するといった観点から離れて、再現または表現するといった観点から議論したい。長きにわたり、映画やテレビの世界では、如何にして当時の様子を再現したり表現したりするかといった部分を追及してきており、人の目を如何に欺くかといった視点でのセットの制作やCG合成が行われてきたが、こうした状況に一石を投じた施設「ワープステーション江戸」が誕生したので、現地調査の様子も交えながら議論したい。ワープステーション江戸は、NHKエンタープライズの施設で、茨城県つくばみらい市にある常設型の撮影施設である。

##### ①中近世エリア

図 65 から図 76 はワープステーション江戸における中近世エリアの建造物群である。特に注目したいのは、(1) セットとして建造した建造物と、(2) 建造物として建造した建造物、そして、(3) ダミーとしてファサードのみを建造したものの三種類が存在する。(1) は、複数の建造物を一棟として建設し、ファサードのみ街並みにしたものの。(2) は、一棟の建造物を一棟ごとに建設したものの。(3) は、一部の面のみ建造物を制作し、見えない背面を鉄骨等で固定したものの。図 65 に示したように、ワープステーション江戸は、中近世エリアと近現代エリアが隣接して建てられている。特に、近現代エリアが存在する撮影所は、ワープステーション江戸が日本初であるとのこと。



図 65. ワープステーション江戸



図 66. 武家屋敷

図 66 は、中世の武家屋敷を再現したものである。(2) のパターンで建造されたものであるため、基礎もしっかりと施工されており、内部も建築用の柱となっているため、しっかりとした建築になっている。図 67 から図 70 に示した建造物は、一見すると、独立した建造物に見えるが、実際には、鉄骨造りであり、複数の建造物が接続して作られている。内部は、図 71 と図 72 に示した通りであり、映像に写り込む部分以外は鉄骨が剥き出しの状態になっている。これらの建造物群は、勝手な想像設計ではなく、当時の歴史資料や専門家の裏付けに基づいており、再現された建造物といえる。



図 67. 江戸城下町風景



図 68. 江戸城下町風景



図 69. 江戸城下町風景



図 70. 江戸城下町風景



図 71. 内部構造



図 72. 内部構造

また、図 73 に示したように、映像のシーンや時代背景に合わせて、屋根瓦を撤去するなど実際の建造物の改修と同様の工法で行われていることもわかる。さらに、図 74 から図 76 に示したように、農民の生活や庶民の生活を再現したセットから、武家や公家が生活した城や城下町を再現したセットまであり、様々な時代の映像を収録可能な施設となっていた。



図 73. 改修工事風景



図 74. 庶民の家屋



図 75. 庶民の家屋



図 76. 江戸城

## ②近現代エリア

当該施設の大きな売りとなっている近現代エリアは、実際の都市にも一部近代建築が残っていることや、昔ではあるものの大昔ではないため、その再現性に大きな議論も呼んでいるとのことである。それは、再現なのか表現なのかといった問題である。一概には判断できないが、当時の様子を再現しているとはいえる。技術的観点や構造的観点での議論になると表現という定義を使うべきであるという考え方も存在した。



図 77. 近現代エリア

図 77 は、近現代エリアでも特に特徴的な建造物群が建ち並んでいるエリアである。「大河ドラマいだてん」のメインストリートにもなったほか、NHK スペシャルの中でも、226 事件を扱ったものなどの再現映像でも用いられた場所である。図 78 や図 79 も当時の様子や雰囲気を十二分に再現できていると考える。



図 78. 近現代エリア



図 79. 近現代エリア

図 80 は、明治大正昭和初期の街の様子を再現した建造物であるが、全て一棟で作られており、内部空間は、図 81 に示したように、一階二階も吹き抜けとなっている。これらの手法は、経費節減と安全上の観点からのことである。



図 80. ファサード



図 81. インテリア

図 82 と図 83 は、当時の商店街や繁華街を再現したものであり、明治大正昭和初期に流行したデザインが多く用いられていることもわかる。実際の都市においてもこうした建造物は残っているものの、建造物群としては存在しないため、貴重な歴史資料にもなり得ると考える。



図 82. 商店街・繁華街



図 83. ファサード

図 84 は、近現代ゾーンのメインストリート正面の建造物である。実際には、建造物に見えるが、裏に回り込むと、片面のセットであることがわかる。巨大な建造物も映像に写り込む側のファサードを如何に緻密に再現するかといった挑戦が行われていることがわかる。



図 84. 近現代エリアメインストリート



図 85. バックヤード構造

さらに、ワープステーション江戸の売りは、図 86 に示した看板建築群と、図 87 に示したすずらん灯通りである。看板建築群もすずらん灯通りも大正時代から昭和初期にかけて流行し、日本全国から、満洲や外地に至るまで、様々な都市に登場した日本の典型的な様式である。これらを正確に再現したという事例はほとんどなく、ワープステーション江戸が最初であるともいえる。担当者の話では、看板建築群は、様々な都市の様々な看板建築群を参考にしてデザインしたものの、同一のものは存在せず、再現というよりも表現に近いといったお話でしたが、現物をベースとしていることを加味すると再現といえる。また、すずらん灯通りも同様の手法を用いているとのことであった。すずらん灯は、様々な資料を元にして、特注で制作したとのことであった。すずらん灯通りは、大河ドラマいだてんの中の「ハリマヤ足袋店（播磨屋）」のロケで使用されたほか、朝の連続テレビ小説なつづらの新宿周辺を歩くシーンで用いられたとのことである。



図 86. 看板建築群



図 87. すずらん灯通り

図 88 と図 89 は、「ハリマヤ足袋店（播磨屋）」としても使用された建造物であり、内部空間も制作されている。実際のドラマのシーンでは、奥はスタジオセットと CG 合成を活用しているとのことである。カメラが寄せて撮る場合には、現物の建造物が存在するオープンセットで撮影し、緻密さが要求されない場所は、スタジオセットまたは CG 合成を用いるとのことであった。



図 88. 商家建築



図 89. インテリア

一方で、表面のファサードのみを再現しているセットも存在し、図 90 と図 91 に示した建造物は、ガラス戸までは再現しているものの、ドアを開けるとすぐに外になっている場合もある。これは、街並みを再現しているためである。



図 90. 建築セット



図 91. 建築セットインテリアの構造

図 93 は、電柱と電線を再現したものである。電柱については、実際に使用された使用済品を専門業者から調達したとのことである。さらに、電線は本来セットの部類になるため、通常は黒色の綿ロープ等が代用されるのが主流であるが、当該施設では、電線の弛み方の正確性を追求するため、電設会社から本物の電線を調達し、架線工事も専門業者が担当したとのことであった。従って、当時を再現したのではなく、当時の状態を保存したともいえる。さらに、図 94 のようにタイミング良くプロペラ機が通過したため、戦前戦中の様子を肌で体感することもでき、歴史的建造物の再現とは、視覚情報のみならず、聴覚情報も重要な要素であることもわかった。



図 93. 電柱と電線



図 94. 近現代エリアの様子

図 95 はすずらん灯の拡大写真であり、図 96 は住宅の玄関の拡大写真である。こうした細かな部分も緻密に再現されており、映像上成立しているだけではなく、現物としても違和感が生じないような工夫が凝らされていた。これこそが、歴史的建造物に内在する情報を発信する上では重要なポイントである。



図 95. すずらん灯



図 96. 門

### ③市電エリア

最後に、市電エリアは、多くの人々が興味関心をそそられる部分であるため、多くの議論もよんでいるとのことであった。特に、銘版には、当時の状態をリアルに再現したと書かれているが、技術的な構造や駆動方法に至るまで、忠実に再現していないため、表現ではないかとの指摘もあったとのことであるが、技術的な議論を排除し、視覚的な観点から論じると、表現ともいえるが、再現ともいえる。勝手に創造または想像して設計したわけではなく、少なくともエクステリア及びインテリアは、当時の状態を再現しようとして様々な写真や資料を参考にして制作したという部分を加味すれば表現ではなく再現である。



図 97. 再現された市電



図 98. 再現された軌道



図 99. 再現された軌道

#### ④ワープステーション江戸の総括

図 100 は、ワープステーション江戸の調査後の集合写真である。このように人物が入った写真を撮影すると、より立体感が増し、本来の街の中に入り込んでいるように感じることができる。しかしながら、ヒアリング調査の結果、課題として挙げられたのは、従来の建造物と圧倒的に異なるのは、一階の造りと二階の造りに大きな違いがあることと、原寸大ではないことの二点であった。具体的には、一階部分の映像に詳細な形状が写り込む部分は細かく作り込んでいるが、二階部分や内部空間に関しては、省略している部分もある。また、実際の街並みを完全に再現する必要がないことから、実世界の建造物よりも若干小振りになっている。これらは、費用対効果と再現性の双方を天秤にかけて、妥協できる接点で落とし込んでいるとのことであった。あくまでも、従来の都市を構築するという意味ではなく、映像ビジネスとしての再現であるため、その点は致し方が無い妥協といえる。一方で、関東近郊の都市で、これだけの常設映像セットを構築できたのは、NHKエンタープライズであったから成し得たものとも考えられる。今後は、近現代エリアの規模拡大と、より、1：1に近い規模での再現が可能になると、より映像にもリアリティが増すものとする。



図 100. 調査後集合写真

(調査協力先：NHKエンタープライズ・ワープステーション江戸)

(調査協力者：山中一郎様、小針麻土様)

## 5. 考察とまとめ

以上に述べたように、「中国山東省青島市の事例」と「ワープステーション江戸の事例」を比較した結果、再現の場合と表現の場合の違いが明らかになった。本論文での定義は、あくまでも建築構造や建築工法には触れず、ファサードの状態とディテール情報に特化した場合に限り、正確に復元・復原されているケース、または、当時の様子を「見える化」しようとしている場合は、再現といえる。一方で、勝手な創造または想像による場合は、創造設計・想像設計とみなし、表現したとなる。

つまり、中国山東省青島市の事例では、当該建造物が現存していても、大幅に改修されているケースや、躯体は当初材でもファサードやディテール情報が置き換えられてしまっている場合には、保存でもなく表現になると考える。ワープステーション江戸の事例では、あくまでも、映像セットを構築している撮影施設であるため、全ての建造物が創造設計・想像設計になっていることは確かであるが、関係者や設計者は、当時の街並みを正確に再現しようとして、日本全国のあらゆる都市にあった近現代の建造物や中近世の建造物を見える化しようと努力している点において再現といえる。一方で、先般より指摘がある、寸法上の問題や、施工方法、駆動方法、素材情報や材質情報が異なるといった部分まで加味した議論をする場合には、再現と表現を組み合わせるといった文言を用いることが良いのではないかと考える。

現在、こうした再現か表現かといった文言の定義や使い方は決められていないため、様々な物差しで測ることで定義が曖昧になっているが、一度、復原と復元の違いや保存と再現の違いのように定義を定める必要がある。

こうした議論も、歴史的建造物に注目が集まり始めたことによって生じるようになってきたことであり、非常に興味深い現象である。特に、丸の内にある「三菱一号館」は、復元か再現か新築かといった議論や、「東京駅丸の内駅舎」は復原か復元か保存かといった議論などが巻き起こっているが、ある程度ケースや領域を分けて定義するほかない。

今後の課題は、こうした議論が発生した際には、現段階では事例研究や事例比較といった定性的手法に留まってしまっているが、今後は、定量的手法によって、数値的に判定できるようにすることが望まれる。

【参考文献】

- [1] 三省堂."大辞泉第三版",三省堂大辞泉,(2006).
- [2] 内藤旭惠."光・影."日本写真芸術学会査読付投稿論文<創作編>,第 25 巻第 2 号(2012):46-47.
- [3] 内藤旭惠."写真を用いた歴史的建造物のデジタルアーカイブに関する研究-旧帝国ホテルライト館の事例を通して."静岡産業大学情報学部研究紀要,17(2015):285-342.
- [4] 内藤旭惠,重藤祐紀,岡本哲志,坂井滋和."歴史的建造物保存の現状とそのCG再現に関する検討."情報文化学会誌,23.2(2016):51-58.
- [5] 内藤旭惠."栄光のかたち."日本写真芸術学会査読付投稿論文<創作編>,第 25 巻・第 2 号(2016):46-47.
- [6] 内藤旭惠,重藤祐紀,堀川華波,岡本哲志,坂井滋和."歴史的建造物の高度な CG 再現におけるディテール情報と素材情報の有効性."画像電子学会誌,46.2.240(2017) : 336-344.
- [7] 内藤旭惠."旧満州における歴史的建造物の現物保存および利活用に関する研究."静岡産業大学情報学部研究紀要,17(2018):245-276.
- [8] 内藤旭惠."過去と未来の交差点."日本写真芸術学会査読付投稿論文<創作編>,第 27 巻・第 2 号(2018):46-47.
- [9] 内藤旭惠."歴史的建造物保存におけるCGを利用したディテール情報再現の実証的研究."早稲田大学大学院博士論文,(2019):全 156 頁.
- [10] 山口泰史."地域観光資源としての歴史的建造物."大阪観光大学観光学研究所年報『観光研究論集』,17(2019):23-35.
- [11] 阿部順子,小林克弘."建築家 R.マレ=ステヴァンスの映画セットデザインに関する考察."日本建築学会計画系論文集,65-535(2000):285-290.
- [12] 高瀬真紀,上松佑二."ドイツ表現主義における「映画建築」に関する研究."日本建築学会学術講演梗概集,(2005):549-550.
- [13] 李木貴子,杉本俊多."フリッツ・ラング監督映画『メトロポリス』における空間構成に関する研究."日本建築学会中国支部研究報告集,30(2007):873-876.
- [14] 吉田拓."溝口健二《元禄忠臣蔵》にみる映画セットの可能性."京都造形芸術大学紀要,13(2008):74-82.